

## 本学教員執筆書籍の紹介

羽田 勝計、荒木 栄一 編集

### 糖尿病性細小血管症

文光堂 2006年5月17日発行

本書は、糖尿病カレントライブラリーのシリーズ第5弾として企画された。

糖尿病は、インスリン分泌障害・インスリン作用不全により血糖値が上昇する代謝疾患であるが、血中に増加したブドウ糖は、直接的あるいは間接的に血管を障害する。これが糖尿病性血管合併症であり、障害される血管の太さから、細小血管症と大血管症に分類されている。大血管症は動脈硬化症であり、糖尿病は高血圧・脂質異常症（高脂血症から名称が変更された）とならんで、そのリスクファクターの一つに位置づけられている。一方、細小血管症は糖尿病に特異的な合併症であり、糖尿病が存在しないと発症しない。細小血管症には、網膜症、腎症、神経障害が含まれるが、網膜症は後天性失明原因の第2位であり、腎症は慢性透析療法導入原疾患の第1位である。神経障害は末梢血管障害も含むと、外傷以外の下肢切断原因の第1位である。すなわち、糖尿病診療に携わるものにとって、細小血管症の重要性は益々増大しているのである。

我が国でも Kumamoto Study で示されたように、高血糖の持続が細小血管症の最も重要な成因である。ただ、組織あるいは臓器特異性のため、網膜症・腎症・神経障害に各々特異的な成因も存在することが示されている。また、細小血管症は各々の診断基準、病期分類が整いつつある。そして、血糖コントロール以外の治療法に関しても多くのエビデンスが集積していると共に、新しい治療法が開発されつつある。

「糖尿病性細小血管症総論」では、まずその歴史と今後の展望を、各々の合併症研究・診療をこれまで指導してこられた3名の先生にご執筆頂いた。次いで、糖尿病性細小血管症に共通する成因および治療の新たな展開を、現在この分野でご活躍中の先生方にご解説頂いた。各論は、成因・病理・診断・治療を基本に、特に最新のトピックスが中心となるよう企画したつもりである。本書を読んでもいただければ、「糖尿病性細小血管症」の全てが理解できると確信している。

羽田 勝計、榎野 博史 編著

### 糖尿病性腎症-基礎と臨床の最前線

中外医学社 2007年10月25日発行

2006年12月20日、国際連合（国連）は「糖尿病の全世界的脅威を認知する決議」を国連総会決議で採択し、同時に従来 IFD（国際糖尿病連合）が World Diabetes Day に指定してきた11月14日を「国連が指定する World Diabetes Day」と認知した。そして、世界各国で糖尿病の予防、治療、療養を喚起する啓発運動を推進することを呼びかけた。スローガンは「Unite for diabetes（団結して糖尿病と闘おう）」であり、ブルーサークルのシンボルマークが作成された。一方、ISN（国際腎臓学会）は2006年より、3月第2木曜日を World Kidney Day に指定しており、この日を中心に世界中で CKD（chronic kidney disease：慢性腎臓病）啓発キャンペーンを行うことにしている。

糖尿病性腎症は、糖尿病の主要血管合併症であると共に、慢性腎臓病の主要原疾患の一つでもある。そして、糖尿病性腎症に起因する慢性腎不全により透析療法に導入される症例数は増加の一途を辿っており、2006年には全導入症例の42.9%を占めるに至っている。一方、糖尿病性腎症の成因解明、治療法の開発も急速に進んで来ており、現在では糖尿病性腎症の臨床的寛解（remission）すら可能な時代に入ってきている。このような時期に、本書「糖尿病性腎症：基礎と臨床の最前線」を上梓できることは、極めてタイムリーであると考えられる。本書では、糖尿病性腎症の成因・病理・診断・治療を基本に、特に最新のトピックスが中心となるよう企画したつもりである。本書を読んでもいただければ、「糖尿病性腎症」の全てが理解できると確信している。そして、本書から、「糖尿病性腎症」を克服する方法も見つけ出すことが可能であると考えている。

羽田 勝計

（内科学講座 病態代謝内科学分野）